

Modal adjective の統語的・意味的差異 — probable, likely, possible に焦点を当てて —

武内 祐樹
(関西学院大学大学院)

1. はじめに—本研究の背景と目的

本研究の目的は話し手の命題に対する心的態度を表す形容詞、つまりモダリティ形容詞の統語的・意味的差異について明らかにすることである。なかでも「ありそうな、起こりそうな」という意味を表す、probable、likely、possible の3語に焦点を当てて研究を行う。この3語は(1)-(3)のような統語構造を取る。

- (1) a. It is probable that he will come.
b. *He is probable to come.
- (2) a. It is likely that he will come.
b. He is likely to come.
- (3) a. It is possible that he will come.
b. *He is possible to come.

3語とも共通して It … that 構文を取るのだが、(2b)のように likely のみが be … to V 構文を取れるのである。(2b)のような構文は、いわゆる「繰り上げ構文」と呼ばれるもので、特に生成文法で様々な議論が行われてきたが、なぜ likely のみがこの構文を取るのかというのは未だに明らかになっていない。

またこの3語は可能性に関する表現であるが、その可能性の度合いについて辞書では以下のような説明がなされることが多い。

- (4) 起こり得る可能性は probable, likely, possible の順で低くなる。
(ユースプログレッシブ英和辞典)
- (5) **Likely** suggests greater probability than **possible**, but less credibility than **probable**.
(Webster's New World Dictionary of American Language)
- (6) 次のような順で確率が低くなる：probably (80-90% くらい) ,likely (70% くらい) , possibly (約20%)
(ウィズダム和英辞典 第2版)

どの辞書においても probable の可能性が最も高く、次に likely、そして possible の可能性が最も低いという説明をしている。しかし、Hooper (1975) では次のような可能性の順番が示されている。

- (7) likely > possible > probable (Hooper, 1975)

確かに (4)-(6) の説明の方が一般的ではあるが、この可能性の順番が絶対的なものではない可能性がある。以上のことをふまえ、本研究の目的は次の 2 点である。

- ① なぜ likely のみが be … to V 構文を取ることができるのか。
- ② probable > likely > possible という可能性の順番は絶対なのか。

この 2 点について、断定性と主観性という観点から論じる。

2. 先行研究 : Hooper (1975)

2.1 Hooper (1975) の分類

Hooper(1975) は、Kiparsky(1970) の叙実的、非叙実的述語をさらに細かく分類し、強い断定的述語、弱い断定的述語、非断定的述語、半叙実的述語、真の叙実的述語の 5 つを区別している。表 1 に示すように、probable、likely、possible は非断定的述語に含まれている。

表 1 述語の 5 分類

Nonfactive		
Assertive		Nonassertive
Weak	Strong	
think	say	be likely
believe	insist	be possible
guess	be certain	be probable
seem	be sure	be conceivable
imagine	be afraid	doubt
suppose	be obvious	deny
Factive		
Semifactive		True factive
find out		regret
discover		forget
know		suffice
learn		bother

5 つの分類の中でも、強い断定的述語と弱い断定的述語、非断定的述語の 3 つに焦点を当てて、分析を行う。Hooper (1975) によると、3 つの述語を分類する特徴が 3 点ある。

- ① 補文前置
- ② 付加疑問
- ③ 否定上昇

この 3 つの特徴について以下で詳しく述べていく。

2.2 補文前置

補文前置とは、その名の通り、補文節を前置させる操作である。ある述語が補文前置を許すかどうかというのは、断定的述語と非断定的述語の区別に関連している。すべての断定的述語は (8) のように補文前置を許す。

- (8) a. I think the wizard will deny your request.
 b. The wizard, I think, will deny your request.
 c. The wizard will deny your request, I think.

(Hooper, 1975, p. 94)

(8a) から補文前置によって、(8b)(8c) ではその補文が文の主断定になっている。一方、元の主節は挿入的に扱われている。このように、断定的述語はその述語自身が断定だからではなく、補文を文の主断定に出来るが故に「断定的述語」と呼ばれている。

それに対して、すべての非断定的述語は (9) のように補文前置を許さない。

- (9) a. *Many of the applicants are women, it's likely.
 b. *He wants to hire a woman, it's possible.
 c. *Factivity is important in other constructions as well, it's probable.

(Hooper, 1975, p. 94)

(8) とは異なり、(9) は補文を文の主断定にできない。このように、非断定的述語はそれ自身が非断定だからではなく、補文を文の主断定に出来ないが故に「非断定的述語」と呼ぶのである。

2.3 付加疑問

付加疑問とは、文尾に疑問文を付加し、相手に同意を求める文である。付加疑問文を作れるかどうかは、述語の種類に左右される。弱い断定的述語は、(10) のように、一人称単数現在形の時に補文から付加疑問文を作ることが出来る。

- (10) a. I think this car needs a tune-up, doesn't it?
 b. I suppose the Yankees will lose again this year, won't they?

(Hooper, 1975, p. 103)

しかし、強い断定的述語と非断定的述語は、次のように補文から付加疑問文を作ることが出来ない。

- (11) a. *I assert that inflation will continue, won't it?
 b. *I agree that the stew isn't cooked yet, is it?

(Hooper, 1975, p. 103)

- (12) a. *It's likely that they're left the phone off the hook, haven't they?
 b. *It's possible we'll be arriving right on time, won't we?

(Hooper, 1975, p. 103)

弱い断定的述語の文では、話し手は補文命題の真実性について疑いを残しており、従ってその真実性について付加疑問文を用いて、相手に同意を求めるのは適切である。一方、強い断定的述語の文では、補文命題の真実性について、話し手は疑いを残さないのので、付加疑問文は不適當である。また、非断定的述語においては、補文に断定を持たないので付加疑問文はやはり不適當である。

2.4 否定上昇

否定上昇は補文節にある否定要素を、主節に移動させる操作である。弱い断定的述語は否定上昇を許す。つまり、(13)のように否定上昇をしても、その文の意味は大きく変わらない。

- (13) a. I think these living conditions are not suitable.
 b. I don't think these living conditions are suitable.

(Hooper, 1975, p. 105)

一方、強い断定的述語は否定上昇を許さない。つまり、(14)のように否定上昇をすると、意味が大きく変化する。主節にある否定要素は当然主節の断定を否定し、補文節にある否定要素は補文に存在する断定を否定する。

- (14) a. He said the door wasn't closed properly.
 b. He didn't say the door was closed properly.

(Hooper, 1975, p. 105)

そして非断定的述語については、否定上昇を許すかどうかは、述語次第である。

- (15) It's possible Mary will not fall in love with John.
 ≠ It's not possible Mary will fall in love with John.
 (16) It's probable that oil prices won't fall this year.
 ?= It isn't probable that oil prices will fall this year.

(Konishi, 1989, p. 1422, 1441)

- (17) It's not likely she speaks Basque.
 = It's likely she doesn't speak Basque.

(Hooper, 1975, p. 114)

まず、possible は否定上昇を決して許さず、probable が否定上昇を許すかどうかは個人差があり、最後に likely は完全に否定上昇を許す。

2.5 まとめ

強い断定的述語と弱い断定的述語、非断定的述語を分類する3つの特徴をまとめると以下のようになる。

表2 3述語の特徴

	補文前置	付加疑問	否定上昇
弱い断定的述語	○	○	○
強い断定的述語	○	×	×
非断定的述語	×	×	△

弱い断定的述語はすべての操作を許し、強い断定的述語は補文前置のみを許す。非断定的述語はほぼ全ての操作を許さないが、否定上昇の点において、その振る舞いは一貫していない。つまり、Hooper (1975) の分類は、特に非断定的述語の分類において不備があると考えられるため、本研究では非断定的述語、とりわけ likely について再分析を試みた。

3. 断定的述語 likely

3.1 語彙的・統語的特徴

Hooper (1975) において非断定的述語とされている probable、likely、possible の3語を否定形にすると、improbable、unlikely、impossible になる。つまり、probable と possible は接頭語 im が付き、likely は接頭語 un が付く。また、第1章で述べたように、この3語の中で、likely のみが be … to V 構文を取ることが出来るのだが、この3語以外で be … to V 構文を取るものに、sure や certain がある。これらを否定形にすると、likely 同様に、接頭語 un が付き、unsure、uncertain になる。これらの特徴から、probable と possible の2語と likely は異なる範疇に属するものであると推測される。さらに、Dixon(2005) が、接頭語 un が付くものは、HUMAN PROPENSITY 形容詞であると論じていること、そして、Hooper (1975) の分類において、sure と certain は断定的述語に含まれることを考慮に入れると、likely もこれまでの分類とは異なり、断定的述語の一種であると考えられる。

3.2 コーパスによる分析

Likely が断定的述語であるということを確認するために、likely が補文前置を許している例をコーパスで検索した。というのも、Hooper (1975) が断定的述語と非断定的述語を区別する最も重要な特徴として述べていたのが、補文前置だったからである。コーパスは BNC と UKWaC を用いた。

- (18) It is a remark that engagingly suggests how little, as a devout atheist, he understood the relation between religion and life. Most believers, it is likely, find it difficult much of the time even to remember what it is they are supposed to believe.

(BNC)

(19) This latter seems to me the most probable alternative, for during the slow and equable elevation of this portion of the island, the subterranean motive power, from expending part of its force in repeatedly erupting volcanic matter from beneath this point, would , it is likely, have less force to uplift it.

(UKWaC)

(20) This INCLUDES locums who, it is likely, could register either (a) where they work regularly; (b) where they have done most of their work in the past 12 months, or (c) where they plan to do most of their work in the next 12 months.

(UKWaC)

(21) All of these , it is likely, will form a coherent group occupying a distinct block of time, rather than the boomerang's having entered, left and re-entered the repertoire of subjects (see Jones & Johnson 1985: 218, for a smiliar argument in respect of axes).

(UKWaC)

(18) から (21) の例はすべて *likely* が挿入句的に扱われており、それぞれの文の主断定にはなっていない。つまり、Hooper (1975) の主張とは異なり、*likely* は補文前置を許すのである。これにより、*likely* が断定的述語である可能性が高まったが、*probable* や *possible* も同様に補文前置を許している例が発見された。

表 3 *likely, probable, possible* の挿入句的使用例数

	BNC	UKWaC
<i>it is likely</i>	3	5
<i>it is probable</i>	0	10
<i>it is possible</i>	0	28

BNC では *likely* の補文前置の例しか発見されなかったが、UKWaC ではむしろ *probable* や、*possible* が補文前置を許している例の方が多く発見された。つまり、補文前置は断定的述語と非断定的述語を区別する特徴としては不適切なものであることが明らかになった。

3.3 否定上昇

補文前置以外の特徴の中で *likely* が断定的述語であることを示すことが出来るものが否定上昇である。*probable*、*likely*、*possible* の中で、*likely* のみが否定上昇を明らかに許すことが出来る。これは断定的述語である *think* や *believe* などと同じ振る舞いである。

Lindholm (1969) と Green (1974) は否定上昇の規則を当てはめることが出来るのは、「意見を持っている」という意味を持つ述語に限られると述べている。

- (22) a. I don't believe John is a very good linguist.
 b. I believe John isn't a very good linguist.

(Lindholm, 1969, p. 148)

- (23) a. I can't believe that he'd take the exam until he's ready.
 b. I can believe that he wouldn't take the exam until he's ready.

(Lindholm, 1969, p. 153)

Lindholm (1969) は (22) の 2 文は言い換え可能であるが、(23) の 2 文は言い換え不可であると述べている。つまり、believe は断定的述語であり、否定上昇を許すという Hooper (1975) の考えに反して、(22) では否定上昇が起こり、(23) では起きないのである。Lindholm (1969) によると、(22) の believe は「…であるという意見を持っている」という意味を持つが、一方で (23) の believe は「…であるという主張を受け入れる」という意味を持っている。

これらの研究が示しているのは、「意見を持っている」という意味を持つ述語は否定上昇を許すということである。さらに、その逆もまた然りで、否定上昇を許す述語は「意見を持っている」という意味を持っているのである。したがって、否定上昇を許す likely は「意見を持っている」という意味を示す。likely がその意味を表すということは、It is likely that の文は、likely という可能性よりも that 以下の「意見」の部分が強調されているという事実につながる。これこそまさに likely が断定的述語である証拠である。

3.4 まとめ

Hooper (1975) の主張とは異なり、likely が断定的述語として振る舞っていることが明らかになった。likely が断定的述語であるということは、

- (24) It is likely that he will come.
 (25) He is likely to come.

(24) の文の補文が主断定になることがある。likely は補文を主断定に出来るが故に (25) のような be likely to V 構文を取ることができるのである。

4. Likely の可能性の度合

4.1 辞書における記述とその問題点

第 1 章でも述べたように、どの辞書においても probable の可能性が最も高く、次に likely、そして possible の可能性が最も低いという説明をしている。しかし、この説明における問題点は、統語構造による変化を考慮に入れていないということである。本研究では、統語構造が変われば、可能性の度合も変化すると想定し、検証を行った。

4.2 可能性に対する統語的影響

Langacker (1995) は、認知言語学の観点から「繰り上げ構文」を分析している。生成文法

においては、同じ深層構造から派生した文章は同じ意味を持つと考えられているが、認知言語学においてはそうではない。つまり、「繰り上げ構文」と「非繰り上げ構文」は同じ意味を持たないと考えられるのである。

- (26) a. That Don will leave is likely.
b. Don is likely to leave.

(Langacker, 1995, p. 37)

(26a) と (26b) における最も大きな差異は、(26b) においては主語の Don に焦点が当てられ、強調されている点にある。(26a) よりも Don が際立っているのである。繰り上げ構文における主語の際立ちは、主語の意志にも関係する。

- (27) a. Bill is certain to get the job, because he pursued it so aggressively.
b. ?That Bill will get the job is certain, because he pursued it so aggressively.
c. Bill is certain to get the job, because he's the only applicant.
d. That Bill will get the job is certain, because he's the only applicant.

(Langacker, 1995, p. 38)

(27a) の文章の流れは完全に自然であるが、(27b) の文の流れやニュアンスにはどこか不自然さがある。つまり、繰り上げ構文の (27a) の前半は主語の Bill の意志が感じられ、それが後半の文意に適合するのだが、(27b) の前半の文主語は Bill の意志を表さないので、後半の文とは適合性が低くなってしまふ。

この繰り上げ構文における主語の際立ちを likely の場合に当てはめてみる。つまり、(26b) の文は Don の意志が際立っており、それによって、(26a) の文章よりも Don will leave の可能性は高くなると考えられる。

4.3 インフォーマント調査

統語構造が変われば可能性の度合いも変わり、繰り上げ構文は、主語の意志が感じられ It … that 構文よりも可能性が高くなるという主張を確証付けるために、インフォーマント調査を行った。英語のネイティブ 20 人に以下の文章を読んでもらい、直感で判断して、Tom が来る可能性の高いものから順に並べてもらった。

- (28) a. It is probable that Tom will come.
b. It is likely that Tom will come.
c. It is possible that Tom will come.
d. Tom is likely to come.

その結果は以下の通りである。

- (29) $d > a > b > c$: 12人
 $d > b > a > c$: 8人

It is ... that 構文の可能性の度合に違いはあるものの、be likely to V 構文の持つ可能性が It is ... that 構文よりも高いことはインフォーマント調査によっても確認された。

5. まとめ

本研究で明らかになったことは次の2点である。

- ① likely は非断定的述語ではなく、断定的述語に分類されるべきである。断定的述語に分類されるが故に繰り上げ構文を取ることが出来る。
- ② 統語構造が変化すれば、可能性の度合いも変化する。繰り上げ構文の持つ可能性は、It ... that 構文よりも高くなる。

これまでの辞書等の記述では、可能性の度合を議論する際に統語的影響を考慮していなかった。本研究において、likely は統語構造の変化によって、可能性の度合も変化することを示した。すなわち、likely は be likely to V 構文を取る場合には、It is likely that 構文を取る場合よりも高い可能性を示すのである。さらに、be likely to V 構文を取る場合、likely は、probable よりも高い可能性を表すと考えられる。なぜならば、前節で示したように、繰り上げ構文は主語の意志が感じられ、それだけその文が持つ可能性も高くなると考えられるからである。つまり、It is probable that 構文よりも be likely to V 構文の持つ可能性は高いのである。以上のことから、probable、likely、possible の新しい可能性の度合の順位を主張する。

- (30) likely to > probable \geq likely that > possible

6. おわりに

可能性を表す表現というのは、ネイティブも感覚で理解しているため、英語学習者にとってなかなか理解しづらいものである。今後は他の可能性を表す表現も考慮に入れ、研究を広げていきたい。

References

1. Books and Papers

- Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S. and E. Finegan. (1990). *A Longman Grammar of Spoken and Written English*, London: Pearson.
- Dixon, R. M. W. (2005). *A Semantic Approach to English Grammar*, 2nd ed., Oxford: Oxford University Press.
- Francis, G., S. Hunston and E. Manning. (1998). *Collins COBUILD Grammar Patterns 2: Nouns and Adjectives*, London: Harper Collins.
- Green, G. (1974). *Semantics and Syntactic Regularity*, Bloomington: Indiana University

- Press.
- Hooper, J. B. (1975). "On Assertive Predicates." *Syntax and Semantics*, vol. 4. 91-124, New York: Academic Press.
- Hooper, J. B. and C. E. Traugott (1993). *Grammaticalization*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Horn, G. M. (1978) "Remarks on Neg-Raising." *Syntax and Semantics*, vol. 9. 129-220, New York: Academic Press.
- Huddleston, R. and K. G. Pullum (2002). *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Kiparsky, P. and C. Kiparsky (1970). "Fact," *Progress in linguistics*, ed. by M. Bierwisch and K. E. Heidolph, 143-173, The Hague: Mouton.
- Konishi, T., ed. (1980). *Eigo Kihon Dooshi Jiten [A Dictionary of English Word Grammar on Verbs]*, Tokyo: Kenkyusha.
- Konishi, T., ed. (1989). *Eigo Kihon Keiyooshi Fukushi Jiten [A Dictionary of English Word Grammar on Adjectives and Adverbs]*, Tokyo: Kenkyusha.
- Konishi, T., ed. (2006). *Gendai Eigo Gohoo Jiten [Sanseido's Dictionary of Present-Day English Usage]*, Tokyo: Sanseido.
- Lakoff, R. (1969). "A Syntactic Argument for Negative Transportation." *Papers from the Fifth Regional Meeting, Chicago Linguistic Society*. 140-147, Chicago: University of Chicago.
- Langacker, R. W. (1990). *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. (Cognitive Linguistic Research, 1.) Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. (1995). "Raising and Transparency." *Language*. 71. 1-62.
- Lindholm, J. M. (1969). "Negative-Raising and Sentence Pronominalization." *Papers from the Fifth Regional Meeting, Chicago Linguistic Society*. 148-158, Chicago: University of Chicago.
- Newman, J. (1981). *The Semantics of Raising Constructions*. University of California dissertation, San Diego.
- Postal, P. M. (1974). *On Raising*, Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Swan, M. (2005). *Practical English Usage*, 3rd ed., Oxford: Oxford University Press.
- Sweetser, E. E. (1990). *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wierzbicka, A. (1988). *The Semantics of Grammar*, Amsterdam: John Benjamins.
- Yagi, K. (1987). *Atarashii Gohoo Kenkyuu [A New Approach to the Study on English Usage]*, Kyoto: Yamaguchi Shoten.
- Yagi, K. (1999). *Eigo no Bunpoo to Gohoo: Imi kara no Approach [A Semantic Descriptive Approach to Modern English]*, Tokyo: Kenkyusha.

2. Learner's Dictionaries

Collins COBUILD Learner's Dictionary (1996), Glasgow: Harper-Collins.

Longman Dictionary of Contemporary English, 5th ed. (2009), Essex: Longman.

The Oxford English Dictionary. [<http://www.oed.com/>]

Webster's New World Dictionary of the American Language (1970), New York: Collins & Cleveland.

Webster's Third New International Dictionary (1961), London: G. & C. Merriam.

Youth Progressive English-Japanese Dictionary (2004), Tokyo: Shougakukan.

3. Corpora

Larry King Live Corpus UKWaC

The British National Corpus UKWaC